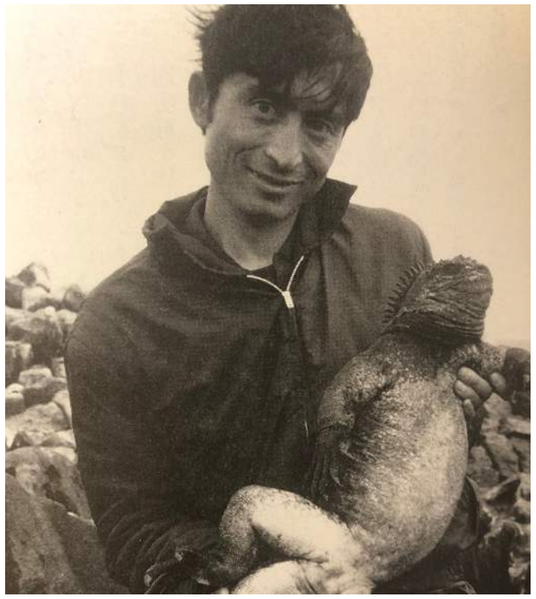
Amazon Folk Museum

山口吉彦／アマゾンコレクションの保存と活用に向けて

プロローグ／私のアマゾン 山口吉彦



激しく降りそそぐ雨を集め
茶褐色に濁った大河アマゾンは悠々と流れる
それ自体がいきものであるかのように泣き
時には笑い　そして怒り　叫ぶ
まるで文明人の挑戦をあざわらい
その侵入を全身で拒むかのように
それを見つめる私は
アマゾンを行く一人の小さな旅人である
網の目のように張りめぐらされた
水路のひとつをさかのぼる
燃えさかる巨大な火の玉のような太陽が
水面にその姿を映しながら
暗緑色の原始林の彼方に沈んでいく

私を乗せたカヌーは　積荷の重さにあえぎながら
一夜の宿を求めて岸辺に近づく
そこは太古さながらの密林が展開され
湿った着生動物が樹の肌をおおい
大蛇のように太く曲がりくねったツルが
木の頂き目指してはい昇る
残照を浴びた緑の壁は
しだいに黒ずんだシルエットと化していく……

これは、アマゾンの魅力にとりつかれ、その調査と研究に青春を賭けていた若き日の筆者が、
ジャングルの奥深くにあるインディオの集落を目指して、何日も何日も、
川をさかのぼっていった時の手記の一節である。
アマゾン――この言葉ほど世界の探検家たちの心をかきたて、ゆさぶる言葉はないだろう。
私は子供の頃から自然が大好きで、世界の秘境アマゾンに憧れを抱いていた。
学生時代には、アマゾン探検誌や、アレキサンダー・フォン・フンボルトや
ヘンリー・ベイツ、アルフレッド・ウォーレス等博物学者の記録を読み耽り、
その度に私の中のアマゾンへの夢は果てしなくふくらんでいった。

時には、白夜の季節に、北極圏に住むラップ人を訪ねて、彼らのテントに寝泊まりしたこともある。
またある時は、単身、サハラの奥深くわけいった。ところが、この熱砂の砂漠で強盗に襲われ、お金や持ち物はすべて、
水筒まで奪い去られるという事件に出くわし、私はそれから三日三晩、厳しい砂の世界、死の世界をさまよい歩いた。
幸いポケットに偶然入っていた 3 個のオレンジで渇きをいやし、かろうじて命をつなぎ、4 日目に、たまたま通りかかったキャラバン
の人達によって救われた。あの時ほど “水と緑の世界” を渇望したことはなかった。そして子供の頃から心に描いていたアマゾンへの
夢が、再び強烈によみがえってきた。
その後、ヨーロッパやアメリカの博物館や大学、研究所などで、アマゾンに関する本や文献をむさぼるように読んでまわった。
それから、密林の中で廃墟になって埋もれているマヤ文明の跡を訪ねたり、アンデス山中に栄えた謎のインカの遺跡を訪ねたりしながら、
徐々にアマゾンへの道をたどった。

少年のころからの夢を胸に秘め、私は、今から 20 年前、初めてアマゾンの源流地帯に足を踏み入れた。
アマゾンとは言え、源流付近は、太古の雪をいただく標高 6,000 メートルのアンデス高山の雪解け水を集めた極く小さな流れに過ぎなかった。
しかし、この流れが谷をぬい、密林を貫き、幾多の支流を集め、徐々に水かさを増して、やがて東方 6,300 キロ先の大西洋に注ぐ
“大河アマゾン” になるのだ。
そのドラマに満ちた壮大な絵巻きを思い浮かべると、感無量になった。必ずや、この大河の上流、中流、下流そして支流と踏査し、
その密林にひそむ動物や植物や、そして自然を友とし原始の森に生きるインディオ達の生活文化を、自分のライフワークとして調査、
研究してみたいという熱い願望が胸の奥から沸き上がってきた。
その後、機会に恵まれ、今まで数えきれない程アマゾンを訪れたが、その度に、密林の中で繰り広げられる自然の神秘や、大自然の
ふところに抱かれておおらかに生きるインディオ達の魅力にますますとりつかれていった。
やがて、私のアマゾンの滞在は、のべにして十数年になろうとしている。
今、私は思い出す。
コバルトブルーの光沢をした「森の妖精」モルフォ蝶が、アマゾンの太陽に照らされて、キラキラ輝く時に感じたあの胸のときめきを。
「いきている宝石」ともいわれるアグリアス (ミイロタテハ) が、捕虫網の中で翅をバタつかせていた時に、夢かと思って
頬をつねってみたことを。一年中、花が咲き、果実が熟す木々の頂きで飛び交う極彩色のコウゴウインコのことを。
それに、緑の森に一瞬にして赤い花を咲かせる真紅のショウジョウトキの群れのことを。
しかし、時には、恐ろしい一面もアマゾンにはある。密林を跋渉していて、足元からジャララカやブッシュマスターといった
毒蛇が飛び出し、ゾクッとしたことも再三あった。また、ある時、木と木の間にハンモックを吊って野宿をしていた際に、
耳元でゴソゴソと何かが動いているので手を伸ばしてみると柔らかな毛むくじゃらのものに触れた。
急いで懐中電燈を当ててみると、大人の掌ほどもあるタランチュラという毒グモだった。とっさにハンモックから飛び下り、
払い落としたものの、腕や顔に毒グモの毛がかかって赤くはれあがっていた。
とにかく、インディオの集落にたどり着くまでの長い道中、予想も付かないようなハプニングがいろいろと起こるものだった。
しかし、目的地に到着したからといって、もう安心というわけでもなかった。初めての部族に接する場合には「未知との遭遇」にも似た緊張感が
伴い、彼らのタブーをおかさないように慎重に行動しなければならない。でも、いったんインディオ達の警戒心がとけると、
彼らは遠方からの客人をあたたかくもてなしてくれた。風俗、習慣はまるで違っていても、この地球上に住む同時代の人間同志が、
カシリ (濁酒) を酌み交わし談笑していると、まさに「人間の原点」に立ち返ったような気がしてくるのだった。
インディオ達は、たくさんのことを私に教えてくれた。アマゾンの大自然の中で、自然を神とあがめ、自然と調和を保って、
生態系のバランスを崩さずに生きるインディオの生活の知恵は、機械文明に侵され人間性を喪失しつつある現代人に、
大きな驚きと感銘を与えてくれるに違いない。
アマゾン――この現代版 “エデンの園” を失楽園にさせてはいけない。それが私たちの心からの願いであり、祈りなのです。

「共生の大地～アマゾンに生きる人々」より引用

アマゾン民族館について

アマゾン民族館は文化人類学研究者である山口吉彦氏が収集した民族資料を
展示・収蔵する施設として 1995 年開館（2014 年閉館）しました。
アマゾン奥地の様々な先住民族と出会い、長年に渡って集めた膨大なコレクションは 2 万点にのぼります。

個人の収集では、恐らく世界においても最大規模のものと言われています。
山口氏はこれらの資料の調査・研究と共に、展示を通して、神秘に満ちた大自然と共に生きる
人間の英知を伝えてきました。
またアマゾン民族館閉館後の現在も、その情熱と理念を分かつ有志と共に活動の継続を目指しています。

アマゾンコレクションの価値について

２万点におよぶ 膨大な資料

ほとんどの工芸収集品が、民芸品店などで購入されたものではなく、
山口氏自身が現地におもむき、製作、使用されている現場で物々交換などにより入手されており、
資料の出所や利用方法などについての情報が確かで、その学術的価値を高めています。

生活工芸品 約 8,000 点、生物の標本、剥製 約 12,000 点。

TRACING THE ROOTS 2019「Amazon folk museum」にて

現在では入手出来ない 貴重な文化資源

収集されたものは、社会的変化や政治的状況のために調査困難なアマゾン川流域のもので、
またそれらの地域は、近年、環境破壊や市場経済の浸透などで先住民の伝統文化が急速に消滅、
あるいは大きな変化を余儀なくされており、今後入手することがきわめて困難な貴重な資料です。

（多くのブラジル先住民資料を収蔵していたリオデジャネイロのブラジル国立博物館が 2018 年に全焼、
また 2019 年に発生した記録的アマゾン森林火災においても先住民の文化を象徴する貴重な資料・工芸品が消失しました）

民族の生活の知恵の集積

日本国内だけでなく、世界の有識者が注目しています。
山口夫妻が収集した資料は、民族の生活に密着したもの（土器やかご、衣服、装身具、弓、矢、槍などの狩猟道具、楽器など）から、
哺乳類、爬虫類、魚類、鳥類の剥製、昆虫など生物標本と幅広く、国立民族学博物館 中牧弘充名誉教授、及び山本紀夫名誉教授などの有識者が
その価値を高く認めています。

コレクションの維持保存と、展示活用に向けて／後世に遺していくためにできることは何か

共通問題としての気候変動
近年この列島でも台風、豪雨、河川氾濫などの自然災害の引き起こす被害が大きくなり、気候変動の切実さが実感されています。
その原因のひとつは、温室効果ガスにあります。北極圏や南極大陸の氷が溶け海水面が上昇し、太平洋諸島などは遠くない未来にもはや住めなくなるといわれています。
ところが、排出量の多い国はその声に耳を傾けず、排出目標を定めた合意から離脱しました。あたかも、沈みゆくのは島々でわれわれではない、と言わんばかりに。
その「われわれ」は、人類の共通基盤としての地球を自らのためだけに分割し、他者との共生を拒んでいることになります。

アマゾンにおける「共生」
世界最大の森林面積を誇るアマゾンの森は、温室効果ガスとなる二酸化炭素を土壌にとどめています。植物は光合成によってつくるエネルギーの4割近くを土壌に与えて微生物の住処をつくり、それらから窒素やミネラルを受け取り生長します。この「共生関係」によって土には水が保たれ、アマゾン河となります。
その河は多くの動物・植物・人間が暮らす森を育み、その森が河を育みます。ところが近年、その森を私的に経済利用する開発が進んでいます。深刻な土壌浸出がもたらされ、地球を支える共生関係はひび割れ始めています。

深まる分断と求められる「コモン」
これらの場合では、ひとつのことが見失われています。それは、「わたしたちがこのひとつの惑星を共有していること」、「わたしたちは他者といまをともにしているという感覚」つまり「ともにあること」といえるでしょう。だからこそ、「私」にも「公」にも還元されない「コモン」を育んでいくことが大切なのではないでしょうか。

ともに世界をみるために
山口吉彦さんが収集したコレクションの重要性は、それが失われれば二度と取り戻せない希少性にだけあるのではなく、それを通じて、わたしたちがインディオ**とともに、**ジャガーやコンゴウインコや他の存在**とともに**、アマゾン**とともに**世界を見る、その眼差しを贈り与えてくれることにあります。山口コレクションが過去から贈りとどけているのは、わたしたちに到来すべき未来なのです。

寄稿：成瀬正憲（日知舎）

TRACING THE ROOTS 2019
「Amazon folk museum」にて

アマゾンコレクション今後の選択肢とご協力のお願い

＜資料の展示や新たな形での活用の企画・提案を募集しています＞
コレクションは、生物資料と民族資料（工芸品）に大別されますが、それぞれの分野に特化した表現や、芸術的な表現、またはそれぞれを融合させることで様々なアウトプットが可能です。
展示する資料の貸し出し、学術研究、データベース構築、
保存に必要な資金の調達（寄付やスポンサー）、資料の一部の売却、または貸与可能な収蔵場所等、
皆さまからのアイデアを広く募っております。

＜移転のためのボランティアを募集しています＞
2020 年 3 月が期日の資料の移転に伴い、
山形県鶴岡市にて、資料の整理や運び出し等で戦力となってくださる方を募集しています。
お問い合せ先：nasuhiko@hotmail.com（ 一般社団法人アマゾン資料館 ）

山口吉彦氏 プロフィールとこれまでの活動履歴

山口吉彦

1942 年生まれ。東京農業大学農業拓殖学科卒。フランスのボルドー大学、リヨン大学へ留学。約 20 年間にわたり、アジア、アフリカ、北米、中南米、オセアニアなど 80 数ヵ国を訪ねて文化人類学的、生物学的調査、研究、資料の収集に従事。在ペルー日本国大使館付属日本人学校、ならびに在ブラジル、ベレン日本総領事館付属日本人学校で教鞭をとる傍ら、アンデス、アマゾン地域のインディオ部族でフィールド・ワーク。帰国後、故郷鶴岡市で、アマゾン民族館の館長を務めながら国際理解と交流の促進に尽力する。

これまでの活動履歴

1942年　山形県鶴岡市に生まれる。
1965年　東京農業大学農業拓殖学科卒業。フランスのボルドー大学へ留学し、のちにリヨン大学へ移る。
1967年　フィールド・ワークを始めアジアやアフリカ、北米、オセアニアなど85カ国を回る。
1971年　在ペルーの日本人学校、ならびに在ブラジル、ベレンの日本人学校で教鞭をとりながら
　　アマゾン奥地のインディオ集落などで調査、研究を開始。
1975年　外務省派遣教諭としてベレンに赴任していた考子さんと結婚。
1980年　膨大なコレクションと共に鶴岡市に帰郷。
1982年　自宅に「アマゾン資料館」を開設し、これまで収集した資料を公開。
1985年　外国人留学生に、ホームステイなどを体験させる「庄内国際青年祭」を実施。
1987年　国際交流活動組織「庄内国際交流協会」を発足。
1988年　山形新聞3P賞（平和賞）を受賞。
1990年　国際交流基金地域交流振興賞を受賞。
1991年　NHK東北ふるさと賞を受賞。
1991年　鶴岡市に、所有する生物資料を中心に展示した「アマゾン自然館」を開設。
1994年　「アマゾン民族館」を開館し、館長に就任。
1996年　大同生命国際文化基金地域研究特別賞を受賞。
1998年　サントリー地域文化賞を受賞。
2003年　カバヤ食品の食品玩具「大神秘アマゾン」の監修を務める。
2005年　鶴岡市制功労表彰受賞。

『共生の大地 -アマゾンに生きる人々- 』共著者：鴻池安志（1992年）大平印刷
『アマゾンに学ぶ「我ら地球家族」』共著者：福原義春（1998年）求龍堂